

〔徒然草〕下碁盤のすみに石をたて、はじくにむかひなる石を守りて彈はあたらす、我手もとをよく見て、こゝなるひじりめをすぐにはじけば、たてたる石必あたる。

〔嬉遊笑覽〕四雜伎、今も兒戲に碁石を彈く事あり、和名抄に、指石などいへるをみれば、指にて彈くものとはまらる。

〔禁秘御抄〕上殿上

圍碁彈碁等盤有臺盤所、近代冬不置之、上古尋常置之。

〔禁秘御抄〕階梯上、彈碁 按盤圖、出北野縁記繪圖、

〔蕙樓閑話〕上、彈碁八勢

宋書ニ云ク、王敬弘、形狀短小、而坐起端方、桓玄謂之彈碁八勢、八勢ハ何ノ謂ナルコトヲ知ラズ、後ニ皇朝類苑ヲ檢スルニ、彈碁用紅綠牙作碁上下字號之、手指碁局取勢相擊、墮多者爲負、排之、

上狹下寬、各八勢也、八ノ字ノ上セマク、下ヒロキガ如キ故ニ、八勢ト云フナリ、

〔源氏物語〕十二須磨、ごすぐろくのばんてうどたぎのぐなど、お中わざにしなして、ねんすのぐおこなひつとめ給けりとみえたり、

〔源氏物語〕湖月抄十二須磨、彈碁略、○中 今日本に彈碁はなし、

〔源氏物語〕四十六權本、所につけたる御しつらひなど、おかしうまなして、ごすぐろく、たぎのばんどもなどとり出て、こゝろぐにすさびくらし給つ、

〔仙源抄〕堂たぎのばん 彈碁枰、碁枰也、

〔和泉式部集〕四たびにたつ、人のもとより、たぎのばむといひし物のありし、たまへどいひたれど、

うせにければ、

いたづらにあればわが身もあるものをはなれむまとて人やとりけん